

今日のような自由な雰囲気の中でさえも起り得ることなのだ悟った。遺伝学者として、また活動家として国際的に有名なデビッド・スズキ氏に「日系カナダ人の義務は、犯罪事実を洗い出したり互いに非難しあつたりすることではなく、我々の社会が、理想に向って確実に進んで行くよう力を貸すことである。理想という言葉は、あまりにも安易に唱えられすぎてゐる」と書かせたものは、ケベック問題であり、一九四二年の強制移住であり、そして、日系カナダ人のような東洋人にならざるを得る可能性のある、カナダにおけるインド人、パキスタン人への人種的偏見である。

強制移住によって失われた貯金や家、またそれによって生じた社会的、心理的断層に対する補償は、日系カナダ人が取り組んで行こうとしている問題の一つである。日系アメリカ人は、最近の全国大会において、一人当たり五千ドルと強制移住期間一日当たり十ドルを各人に配分するものとして、総計二十億ドルの補償を求めたことを決定した。

現在までに、日系アメリカ人は、約五千万ドルの獲得に成功している。これは日系アメリカ人が蒙った損失として、ある政府機関が算出した五億ドルのほんの一部である。日系カナダ人に関しては、それに匹敵する額が歴史の中に埋もれている。ニューズ・キャスター、ピエール・バートン氏のスタッフが調査したところによると、損失を蒙った日系カナダ人の四人中一人は、日本人財産損失補償要求委員会に訴えることもできない状態にあるとある。

しかし、いくつもの事実が明らかにさ

れている。例えば、日系カナダ人の家族が所有していた、フレイザー峡谷の牧場七ヶ所、総面積にして一万三千エーカーを、復員軍人対策評議会が八十三万六千二百五十六ドルで買取り、戦後、復員してきた退役軍人にそれを分配した、というふうなこと。「この価格は、公正と言うにはほど遠い。その証拠をあげることができない」とバートン氏は言っている。

このような例は、いくつでもある。しかし、多くの、いや、おそらくはほとんどの人々が、できれば強制移住のことを忘れたらと思つており、一世、二世に特有の「しかたがない」との態度をとつている。これが日系カナダ人にとって、ジレンマとなつてゐるのである。

成功が大きな抑制力となつてゐるとも言える。トミー・シヨヤマ氏は大蔵次官として、オタワにおける最も有力な文官の一人である。フランク・モリツグ氏は新聞の編集者を務めた後、現在、オンタリオ州の高級官僚となつてゐる。レイモンド・モリヤマ氏は、カナダにおけるトップ・クラスの建築家、そしてシズエ・タカシマ氏は作家として、美術家として名を成している。その他、政府機関でも、教師、歯医者、弁護士、エンジニア等の職業でも、また、今日ではマスコミ界でも、活躍が目立っている。

しかし、多くの若者にとつて、成功も真実を見誤らせるものであつた。カナダにおける人種間関係は、世界で最も良好なもの部類に属するとは認めながらも、若い日系カナダ人は、カナダは多くの人が主張するようなユートピアの人種融合国家ではないと考へてゐる。

(バンクーバー・サン前東京特派員)

永野萬蔵は、一八五三年、長崎県口津大泊で網元の息子、六人兄弟の四男として生まれた。父親は喜平といつた。故郷で大工見習をしてゐたが、船の修理を手伝つてゐるうちに密航を決心したといわれる。一八七七年三月、萬蔵は英国船に乗り込んで横浜を出発、五月にカナダの太平洋沿岸に達した。二十四才のときである。

萬蔵は冒険心に富んでいただけでなく、商才もあつたとみえて、上陸後、ニュー・ウエストミンスターでイタリヤ人漁夫と手を組んで鮭漁に従事し、その後バンクーバー一帯の日系製材工の親方となつたり、ゴールド・ラッシュで湧くクロンダイクへ向う人たちに食料・雑貨を売つたり、ホテルを営んだり、みやげ品店を開いたりしてゐる。海外では初めての銭湯も経営した。一時日本へ帰つて、横浜で洋風レストランの経営に携つたこともある。鉄道建設に働く中国人労働者を呼ぶ仕事もした。一九〇九年のピクトリア市住居録には、ジャック・ナガノの住所として三つも載つてゐる。

当時、彼は二つのみやげ品店、食料品店一軒、下宿一軒を営んでゐた。

萬蔵は正式な教育こそ受けていなかったものの、いろいろな事業に成功し、ピクトリアの日系人社会では指導的人

先駆者・永野萬蔵



◀永野萬蔵(中央)と家族。萬蔵を囲んで、左から長男辰雄の妻、辰雄、次男照磨、多誉夫人。1910年、シアトル。

物となつた。

第一次世界大戦中、日本の戦艦がピクトリアを基地に北米太平洋沿岸を巡航した。萬蔵はこれにも重要な役割を果たして、表彰されている。

しかし戦後、事業は衰退に向かい、健康もおとろえてきたので、一九二二年、故郷の口津津に帰つた。そして帰国して二年後の一九二四(大正十三)年五月二十一日、萬蔵はついに他界した。七〇才であつた。口津津の玉峰寺には、「永野萬蔵の墓。多誉之を建立」と刻まれた墓石が、多誉夫人の手によって建てられている。

萬蔵には二人の息子があつた。ピクトリアで生まれた長男ジョージ(辰雄)は一九一五年頃米国に移住、現在ロサンゼルスで健在である。八十六才。次男のフランク(照磨)は辰雄の腹違いの弟で、オーシャン・フォールズ、ニュー・デンバーなどに住んだあと、一九六七年、ケベック州ファーンハムで亡くなった。照磨には五人の娘があつて、すべて白人と結婚した。辰雄には息子が三人、娘が一人いた。

しかし辰雄は弟家族について会つたことがなく、また家族同士もこれまでになつた一回、しかも短期間だけ会つたきりだといふ。百年祭を記念して、家族同士の再会が計画されている。